

軟部組織の見立て

通常の見立てを行い、原因の部位を施術する際に関節性 or 筋膜性の OFF を作っても緊張がとれない場合に、触って（筋性 or 神経性の OFF）反応がある部位に軟部組織の施術を行う。

関節性、筋膜性の OFF で緊張がとれるものは軟部組織の緊張ではなく、筋紡錘の緊張なので軟部組織施術をする必要がない。

軟部組織に緊張が起こっている場合は、触る事で軟部組織に圧力が加わり緊張が軽減する。

反応がでている状態＝間接法なので検査中に緊張が改善する事もある。

見立てて反応が出なくなったら、その日の施術は終了。

セルフチェック

通常セルフチェックを行い、原因の部位をストレッチしても緊張がとれないが伸びて気持ち良い場合に 30 秒～1 分位ゆっくりと伸ばす。

緊張があって伸びない場合は筋紡錘 ON になっているので軟部組織の緊張ではない。

触って（筋性 or 神経性の OFF）反応がある間には行うが、反応がない場合はそれ以上行わない。

椎間板の見立て（胸椎と腰椎）

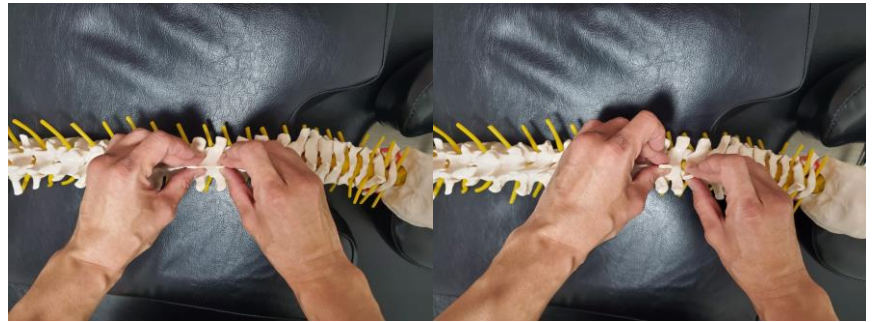
伏臥位で椎骨をベッド方向に
圧迫して可動性を確認する

OFF の手で感じて、ON の手で押
す



可動性の悪い部分を見つけた
ら棘突起をつまむようにして、
術者から見て左右（頭側と足
側）にスライドする

同様に棘突起をつまんで回旋
する



頚椎の見立て

中指と薬指を斜角筋に当てる

後頭骨を持ち、顎を挙げて DFL に
関節性の OFF を作る

一椎毎に左右に動かして可動性
の悪い椎間を探す

